

兵庫県産蝶類分布資料 (1)

—ヤマキマダラヒカゲ・エソスジグロシロチョウ—

広畑 政 己

1. はじめに

兵庫県に於てこれまでに採集された蝶は、偶産種を加えると 130 数種を数えるが、これらの種の大半を、山本広一、吉阪道雄両氏が1958年から1960年にかけて「兵庫生物」誌上に「兵庫県産蝶類目録」として報告されている。その後1970年には山本広一氏によって、1964年までに県下で土着が確認された119種のうち、局地的な分布をしている50種についてその詳細を「月刊むし」No.3に「兵庫県の蝶相」として報告され、県下に生息する蝶の分布の大略が明らかになっている。

1970年代に入ると、県下各地で同好会が次々と結成され、その影響で、従来にも増して精力的な調査が行われるようになった。その結果、ベニモンカラスジミの県下に於ける初記録というビッグニュースをはじめ、ナガサキアゲハの土着や、ヒサマツミドリシジミを筆頭にミドリシジミ類の新しい産地の発見など話題はこと欠かない。

その反面、環境の変遷やその他の諸条件により、ヒョウモンモドキなど現在絶滅したと思われる種や、オウラギンヒョウモンのように激減している種もかなりでてきている。

このような状況の中にあつて、華やかな話題をまく蝶の影に隠れ、日の目をみない種も多くある。特にこれらの種については、生態面はおろか分布すら解明されていないのが実状である。

そこで、これらの種のうち、この度はヤマキマダラヒカゲ、エソスジグロシロチョウについて、筆者の数年の分布調査の結果と、これまでに報告された記録とを併せて県下に於ける両種の分布をまとめてみた。

両種は県下に生息する蝶の中でも極めて同定の困難な種で、ヤマキマダラヒカゲについては11年前まではサトキマダラヒカゲと同種となっていた。従つて、それまでの報告ではサトキマダラヒカゲとして取扱われているため、ヤマキマダラヒカゲとしての記録の集積がなく、この度の報告では、そのほとんどが、1971年以降の記録となった。スジグロシロチョウ、サトキマダラヒカゲとして採集されている標本の中には、両種

がかなり紛れ込んでいることも充分考えられる。

ヤマキマダラヒカゲの同定に当つては、高橋真弓(1970)に従つた。またエソスジグロシロチョウに関しては、発香鱗と発香囊の大きさの比率(♂の場合)と鱗粉を除去した後のソケット列の交錯比率(♀の場合)を用いた。※印のあるものはこの方法で同定したものである。

両種の同定に当つては、新川勉、藤岡知夫の諸氏に御助力いただいた。また、採集記録を御提供いただき、調査に御協力下さった次の方々にお礼を申し上げる。相坂耕作、青山潤三、入江照夫、石井為久、上田尚志、尾崎勇、黒田収、木下賢司、木村三郎、高橋寿郎、西隆広、花岡正、森下泰治、八木弘、山本広一、吉田豊(アイウエオ順、敬称略)

2. ヤマキマダラヒカゲの分布について

国内に産するキマダラヒカゲ属 *Neope* の 2 種は、1970年以前は同種とされ、種内に平地型と山地型の 2 型があることが知られていた。しかし、高橋真弓(1970)は、このキマダラヒカゲの平地型と山地型は同一種内の亜種や遺伝型ではなく、まったく独立した別の種であるという見解を提唱され、従来キマダラヒカゲとされていたものは、サトキマダラヒカゲとヤマキマダラヒカゲの 2 種に分類され現在に至っている。

国内に於けるヤマキマダラヒカゲの分布は、高橋真弓(1970)によれば、北は北海道から南は九州に至る地域に分布しているが、その分布域は一般的には山岳地帯に限られ、平地には分布しないのが普通であると記されている。現に兵庫県下に於ても主として高標高地にその生息地が多かったが、谷晋(1980)や高橋真弓・青山潤三(1980)の房総半島の本種の分布に見るように、県下に於ても低山地(標高20m~80m)にも分布が確認されており、山岳地帯の蝶のイメージを一新している。県下に於ける採集記録を産地別に 1 例づつ記すと次の通りとなる。

〈採集記録〉

城崎郡日高町金山	1♂1♀	12-V-1978	木下賢司 ⁽⁴⁾
" " 金屋	1♂	1-V-1979	"
" " 稲葉	1♂	12-V-1980	"
" " 観音寺	1♂	1-VI-1981	"
" 城崎町来日岳	1♂	12-V-1975	" (6)
豊岡市三開山	1♂	17-VII-1980	"
" 福成寺	2♂	25-V-1981	"
" 上佐野	2♂	16-V-1981	"
" 妙楽寺	—	28-VIII-1973	遠藤知二 ⁽⁴⁾
養父郡大屋町藤無山山頂	1♂	5-VI-1979	木下賢司
" " 横行	2♀	14-VII-1973	尾崎 勇
" " 若杉	1♂	11-V-1975	八木 弘
" 関宮町水ノ山東尾根	1♂	25-V-1967	日浦 勇 ⁽⁴⁾
" " 葛畑	1♀	6-IX-1981	広畑政己
" 養父町須留峰	3♂	7-V-1980	木下賢司
出石郡出石町桐野	1♂	15-V-1980	"
" " 茗荷谷	1♀	18-VI-1978	広畑政己 ⁽⁷⁾
" 但東町中山	2♂	19-V-1979	木下賢司
美方郡美方町美方高原	1♀	9-VII-1978	広畑政己 ⁽²⁾
" 村岡町躍山	1♂1♀	12-V-1978	木下賢司
" 温泉町春木	5♂1♀	16-VIII-1980	広畑政己 ⁽²⁾
多紀郡城東町箆坊	1ex	7-V-1972	浜田 稔 ⁽²⁾
朝来郡生野町栃原谷	1♂	4-VIII-1963	日浦 勇 ⁽⁴⁾
" 和田山町糸井谷	1♂1♀	16-V-1978	木下賢司 ⁽⁷⁾
宍粟郡一宮町小原	1♂	18-V-1980	広畑政己 ⁽²⁾
" " 富士野	1♂	27-VIII-1980	" (2)
" " 波賀町赤西溪谷	6♂	10-V-1981	"
" " 引原ダム	1♀	19-VIII-1980	相坂耕作
" " 音水	1♂	18-V-1974	尾崎 勇
佐用郡佐用町日名倉山	1♂	18-V-1980	広畑政己 ⁽²⁾
" " 青木	1♂	15-VI-1980	石井為久
神崎郡大河内町砥峰	1♂	5-VII-1976	"
" " 太田池周辺	—	—	木村三郎 ⁽³⁾
" " 峰山	1♂	26-VIII-1981	広畑政己
川辺郡猪名川町高岳	4♂	18-V-1974	浜田 稔 ⁽²⁾
" " 大野山	5♂1♀	25-V-1974	宮内史雄 ⁽²⁾
川西市妙見新滝	1♂	31-V-1969	浜田 稔 ⁽²⁾
西脇市岡ノ山	1♀	—VI-1977	吉田 豊
神戸市山田町、有馬町、摩耶山頂、太山寺			加藤昌宏 ⁽⁴⁾

日本海側の分布については、木下賢司氏をはじめ但馬虫の会の方々の精力的な調査によって多くの産地が見つかっているが、図1で見ると通り、本種が生息していると推測できる養父郡八鹿町から多紀郡に至る県下

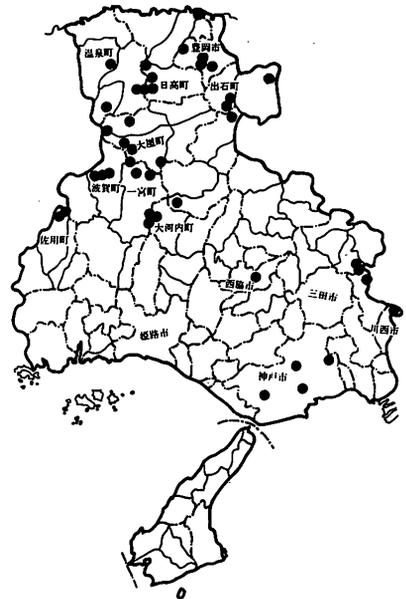
東北部の地域からは、まだ本種が発見されていない。しかし前述の通り、キマダラヒカゲとして採集された中に本種が混っているか、発表されていない記録も多いものと思われる。

一方垂直分布の範囲は広く、下限は豊岡市妙楽寺、上佐野などの標高20mの記録があり、同市福成寺、西脇市岡ノ山(80m)、日高町観音寺と床ノ尾山霧野(100m)、豊岡市三開山と佐用町青木(160m)がこれに次いでいる。

これら標高200m以下の産地は、概知産地37ヶ所のうち約30%にあたる11ヶ所もあるが、西脇市岡ノ山、佐用町青木以外はすべて日本海側にある。この垂直分布の様式は、クマザサを食草としているヒメキマダラヒカゲの瀬戸内側は高く、日本海側は低いという様式に類似している。

標高1,000m以上の記録としては、氷ノ山東尾根、藤無山山頂、須留峰の3ヶ所があるが、県下に於ける垂直分布の中心は標高300m~900m(図2)の樹林帯周辺のクマザサの分布する地域とおおむね一致することから、クマザサの生息できる気候と環境が重要なポイントになっているようである。県下に於ける本種の食草は、一宮町富士野でクマザサを確認しているが、前記の概知産地のうち、西脇市岡ノ山や豊岡市妙楽寺などは、クマザサが分布していないことから、今後食草との関連も併せた調査が望まれる。

図1. 兵庫県に於けるヤマキマダラヒカゲの分布概念図



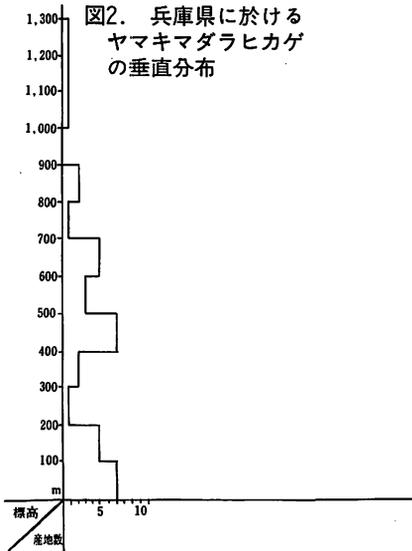


図2. 兵庫県に於けるヤマキマダラヒカゲの垂直分布

3. エソスジグロシロチョウの分布について

本種もキマダラヒカゲ属 *Neope* の2種同様同定の困難な種で、特に春型と夏型の♀は近似種のスジグロシロチョウと酷似し、小さな個体で、翅形に丸味をもったスジグロシロチョウは、どちらに分類しようかと思えばしばしば迷った経験がある。しかし、前述の通りの方法で同定すると、まぎらわしい個体も容易に見分けられる。これまでに筆者の把握した採集記録と産地別に1例ずつ上げると次の通りとなる。

<採集記録>

神戸市六甲山上	1♂	25-VII-1951	吉阪 道雄 ⁽¹⁾
〃 東灘区御影町	1♂	27-VI-1953	〃 ⁽²⁾
〃 中央区再度谷	1♂	夏型 -1962	青山 潤三
〃 摩耶	—	—	加藤 昌宏 ⁽⁴⁾
〃 有馬	—	—	〃 ⁽⁴⁾
宝塚市宝山寺	1♂	21-IV-1968	宮武 ⁽⁹⁾
※ 〃 武田尾	1♂	11-IV-1981	西 隆広
川西市笹部	—	26-IV-1970	仲田 元亮 ⁽²⁾
〃 花折橋	1♂	20-VI-1971	日下部真雄 ⁽²⁾
〃 新滝道	—	29-IX-1976	仲田 元亮 ⁽²⁾
〃 ゴルフ橋～西畦野	1♂	7-VI-1964	日浦 勇 ⁽⁹⁾
〃 移瀬～虫尾	1♀	17-IV-1962	〃 ⁽⁹⁾
〃 一庫	1♂1♀	26-VII-1966	高須賀信悟 ⁽²⁾
〃 一ノ鳥居	1♀	23-IV-1972	日下部真雄 ⁽²⁾
川辺郡猪名川町馬場	—	8-VIII-1976	仲田 元亮 ⁽²⁾

川辺郡猪名川町広瀬～銀山	1♂1♀	5-V-1961	日浦 勇 ⁽⁹⁾
※西脇市野村	1♂	14-IV-1973	木下総一郎 ⁽²⁾
※ 〃 出合	1♀	13-IV-1978	尾崎 勇 ⁽²⁾
※ 〃 平野	1♂	—IV-1980	吉田 豊
※多可郡黒田庄町門柳	1♀	16-IV-1976	森下 泰治
加古川市友沢	(羽化)1♀	25-III-1959	中谷 貴寿 ⁽¹⁸⁾
※相生市三濃山	1♂	29-V-1978	入江 照夫 ⁽²⁾
※神崎郡福崎町新	1♂	4-VI-1975	石井 為久 ⁽²⁾
※ 〃 大河内町川上	1♂	5-V-1980	広畑 政己 ⁽²⁾
※佐用郡上月町上秋里	1♂	14-VI-1980	西 隆広 ⁽²⁾
〃 佐用町水根～海内	—	—	〃 ⁽²⁾
※宍粟郡一宮町上野田	1♂	15-IX-1978	広畑 政己 ⁽²⁾
※飾磨郡夢前町馬頭	1♂	9-V-1979	相坂 耕作 ⁽²⁾
※ 〃 〃 雪彦山	1♂	4-V-1972	木下総一郎 ⁽²⁾
※朝来郡生野町川尻	1♂1♀	16-VIII-1976	木下 賢司
※ 〃 〃 奥銀谷	1♂	4-VI-1979	戸田 智三 ⁽²⁾
〃 生野駅栃原トンネル間	1♀	3-VIII-1963	日浦 勇 ⁽⁹⁾
美方郡浜坂町三尾大島	1♂	7-VIII-1962	筒井 〃 ⁽¹⁹⁾
※城崎郡日高町金山	1♂	1-VII-1978	木下 賢司 ⁽¹⁴⁾
〃 竹野町猫崎半島	1♂	30-VIII-1980	〃
※養父郡大屋町若杉	1♀	12-V-1973	尾崎 勇 ⁽²⁾
※ 〃 〃 田淵	1♂	7-V-1980	木下 賢司
尼崎市	—	—	〃 ⁽²⁾
※津名郡北淡町江崎	1♂1♀	14-VII-1961	尾崎 勇 ⁽²⁾
〃 〃 常隆寺山	1♂	19-VIII-1970	登日 邦明 ⁽¹⁵⁾
※ 〃 津名町佐野興隆寺	1♂1♀	11-V-1980	広畑 政己 ⁽²⁾

本種の県下に於ける分布を見ると、スジグロシロチョウよりはるかに局地的ではあるが、その分布域は図5の通り、淡路島から日本海側まで兵庫県全域にかけて点在している。

筆者が調査した生息地のうち、淡路島の佐野興隆寺では本種のみが見られたが、雪彦山、三濃山、大河内町川上、西脇市出合、黒田庄町門柳ではスジグロシロチョウと混生しており、県下での本種の生息地はこのようなところが多いのではないと思われる。

また、一般的に山間部の林縁や溪谷沿いの空地などを生活の場所としているようであるが、県下の場合、そのような場所もあるが、西脇市のように田畑周辺の林縁や福崎町新のように市川の堤防のようなどころもあり、スジグロシロチョウ生息場所と比較すると際立った特徴はない。しかし、スジグロシロチョウと本種の記録を比較してみると、スジグロシロチョウの採集記録のある波賀町東山、大河内町峰山、砥峰、関宮町杉ヶ沢、村岡町北鉢伏山、温泉町春木峠、波賀町赤西、美方町三原高原、美方高原などを標高が500m～1,000m

の地域からは本種の記録がない。垂直分布図(図3.4)で見てわかる通り、スジグロシロチョウは400m以上でもかなりの記録があるのに対し、本種は400m以上の産地は5ヶ所よりなく、スジグロシロチョウが低標高地から高標高地、本種が低標高地に分布するという以外な結果がでている。

図3. 兵庫県に於けるスジグロシロチョウの垂直分布(124産地)

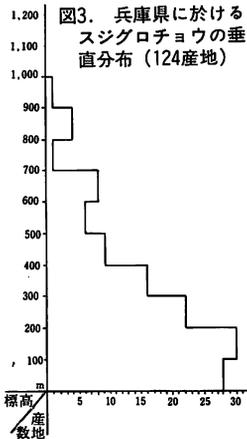


図4. 兵庫県に於けるエゾスジグロシロチョウの垂直分布(38産地)

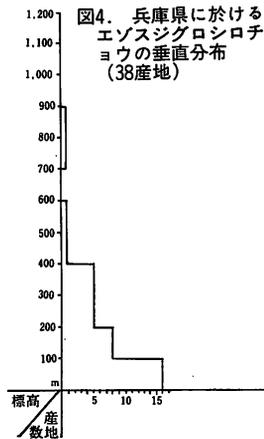
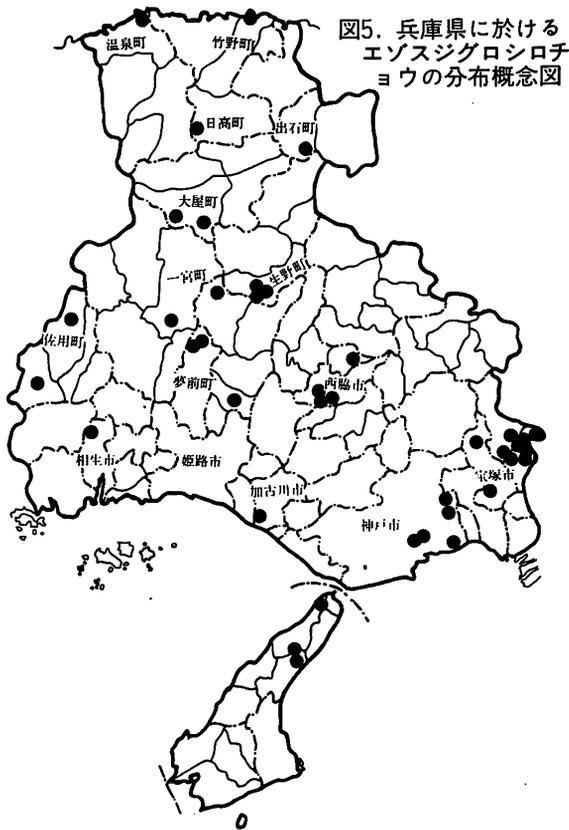


図5. 兵庫県に於けるエゾスジグロシロチョウの分布概念図



4. おわりに

以上、ヤマキマダラヒカゲとエゾスジグロシロチョウの分布の一端にふれてみたが、両種とも同定が困難なことから、普通種であるということから、同好者の注目を集めず、珍しい種と比較すると研究もたち遅れた状態になっている。

これまで採集された標本の中にも両種が混入していることも充分考えられるので、それらの標本と、今後県下各地の調査に行かれた折に採集された個体を拝見できる機会があれば幸せである。

発表に際しては、キマダラヒカゲ属2種の分布の比較などを行うことが最良と考えたが、筆者の手元には採集記録も少なく、記録の集積ができるのを待って次の機会に、今回ふれなかった生態面も加えて報告したいと考えている。

〈参考文献〉

- (1)上田尚志(1980)家島群島の昆虫、きべりはむし 8(2): 21-27
- (2)大阪昆虫同好会(1981) 北摂の昆虫(1)、兵庫
- (3)奥谷禎一・木村三郎(1978) 大河内町揚水発電所予定地付近の蝶、大河内地点自然環境実態調査報告書、47-50
- (4)加藤昌宏・武衛晴雄(1981) 神戸市の蝶、兵庫
- (5)小倉 滋・高橋久夫(1978) 三木市の蝶について きべりはむし、6(1・2): 8-16
- (6)木下賢司(1977)来日岳の蝶、IRATSUME (1): 21-33
- (7)木下賢司(1979)床ノ尾山の蝶、IRATSUME (3): 20-32
- (8)高橋真弓(1970)日本産キマダラヒカゲ属 *Neopele* に属する2つの種について、蝶と蛾 21(1・2): 17-36
- (9)高橋真弓・青山潤三(1980)千葉県房総半島のヤマキマダラヒカゲ、蝶と蛾、30(3・4): 250
- (10)高橋 匡(1975)豊岡高等学校昆虫標本目録(1・2報)
- (11)高橋 匡(1979)但馬地方昆虫目録 IRATSUME (3): 40-58
- (12)谷 晋(1980)房総ヤマキマダラヒカゲの生活史、蝶と蛾、30(3・4): 250
- (13)谷角素彦(1978)日高町金山の蝶、IRATSUME (2): 11-21
- (14)谷角素彦・足立義弘(1979) 金山・蘆武山系の蝶 IRATSUME (3): 8-18
- (15)登日邦明(1974)淡路島の蝶相(1) 佳香蝶26(9): 9-15

- (16)仲田元亮(1978)能勢の昆虫、兵庫
 (17)中口公一郎・吉阪道雄(1954) 六甲山蝶類目録
 MDKNEWS 別冊
 (18)中谷貴寿(1959)加古川市の蝶類、MDKNEWS
 12(1): 10-13
 (19)日浦 勇(1969)日本列島の蝶、大阪市立自然科学博物
 物館収蔵資料目録、大阪
 (20)広畑政己(1979)エゾスジグロシロチョウの採集記録
 一例、ひろおび (4): 16
 (21)広畑政己(1979)美方高原7月上旬の蝶 IRATSUME
 (3): 38-39
 (22)広畑政己(1980)兵庫県に於ける蝶5種の新産地
 てんとうむし (6): 30
 (23)広畑政己(1980)淡路島の蝶類調査報告 Parnassius
 (23): 5-8
 (24)広畑政己(1980)エゾスジグロシロチョウの採集記録
 数例・ひろおび (5): 6
 (25)山本広一・吉阪道雄(1958) 兵庫県産蝶類目録(1)
 兵庫生物 3(4): 228-236
 (26)山本広一(1971)兵庫県の蝶相 月刊むし (3): 2-10
 (S.28:MASAMI HIROHATA 姫路市)

ルリボシヤンマ・オオルリボシヤンマ の新産地 相坂耕作

北方系の種で県下では珍しい種とされているルリボシヤンマ (*Aeshna junciea* LINNÉ) は兵庫県では分布の西限に近く次の2ヶ所が既産地として有名である。すなわち氷ノ山古生沼、砥ノ峯である。しかしその後県下の各地にて得られているので記してみた。

養父郡関宮町杉ヶ沢 2♂ 9-IX-1979 Col. 相坂耕作
 " " " 2♀ 29-VIII-1979 Col. 相坂耕作
 宍粟郡安富町鹿ヶ壺 1♂ 11-X-1977 Col. 尾崎 勇

日本特産のオオルリボシヤンマ (*Aeschna nigroflava* MARTIN) は西南日本では産地は少ないとの事であるが文献上多くの産地にて得られている。その後文献上掲載されていない産地にて得られているので記しておきたい。すなわち、

姫路市広峰山 1♂ 31-VIII-1976 Col. 相坂耕作
 赤穂郡上郡町富満 1♂ 24-IX-1979 Col. 相坂耕作
 相生市三濃山 1♂1♀ 15-IX-1980 Col. 尾崎 勇
 以上である。標本を恵与頂いた尾崎勇氏に深謝致します。

(S.05: KOUSAKU AISAKA 姫路市)

昆虫館だより ⑤

千種川グリーンライン昆虫館

館長 内海 功 一

本年の大寒のころ、ガロアムシのようすが知りたくなり、近くの山を掘ってみた。案の定、凍結していない場所の石の下から小さなものや中程度のものが、かなり見つかった。

暗色の土の上をうろつく白色のこの虫はよく目立つものである。

つぎには5月頃、場所を変えて掘ってみた。この時は、ごく浅いところから見つかった。いまでもその時の3匹は生きている。

船越山でガロアムシを知ったのは、もう10年以上も前のこと、当時国立科学博物館の上野博士と姫商の森本義信先生とが、もう寒くなった11月、船越山産の新種、チビゴミムシの確認に來られたことがあった。それを手伝った所、目的のチビゴミムシは見つからず、ただ何匹かのガロアムシが出てきただけだった。

また来年ということで、翌年の5月、場所を変えて探した。その時は目的の虫も得られるし、また、ガロアムシも出てきた。

しかしこの虫については目的外で何も気にせずいたものである。

その後、昆虫館での冬季、廊下の掃除中に、見つかった白い虫がガロアムシであることはすぐにわかった。など、船越山でのこの虫との出会いにはこのような思い出もある。

県下でも、昔から地表の安定した場所で探せば、まだまだ産地が見つかっていくことだろう。

(1981-9-25、記)

(S.08: Koichi Utsumi 佐用郡南光町船越)